



Title	わが国におけるフランス語圏心理学の導入とその受容について（2）：戦後の児童精神医学と障害児教育への影響を中心に
Author(s)	間宮, 正幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 106, 1-20
Issue Date	2008-12-18
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.106.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35070
Type	departmental bulletin paper
File Information	106_p1-20.pdf



わが国におけるフランス語圏心理学の導入と その受容について(2)

— 戦後の児童精神医学と障害児教育への影響を中心に —

間 宮 正 幸*

The Introduction and the Acceptance Process of 'Psychologie Française' into Japan——Ⅱ : Discussion from the Point of the Influence to Child Psychiatry and Education for Children with Disabilities after World War Ⅱ

Masayuki MAMIYA

【要旨】本論では、戦後の児童青年精神医学と障害児教育の領域を中心に、わが国におけるフランス語圏心理学の影響を検討した。フランスでは、Rousseau, J.-J. の子どもへの関心、Itard, J. M. G. の人道主義的な医学的教育学的実践、ビセートル病院におけるSéguin, É. の障害児教育などを源流とする理論と実践があり今日に至っている。しかし、わが国の発達教育臨床研究においては導入の過程でそうした本来の伝統領域が切り離されてしまった傾向がある。フランス語圏心理学の発達教育臨床論では、病理的心理学から発達論的心理学へという展開、運動と精神の同一性と対立に関する見解、発達の正常と異常に関する異質性と同一性の思想などが重要である。日本、フランス共に戦後は英国圏心理学の影響が大きいのであるが、子どもの権利や社会的リハビリテーションを重視する観点は、フランスの発達教育臨床の科学と思想の伝統の中で息づくもので、まず、これを導入しなければならなかったのである。

【キーワード】児童青年精神医学と障害児教育の源流、精神病理と発達、治療・教育論、子どもの権利、「土着の心理学」の形成

はじめに

歴史の転換期に直面するわが国の教育学・心理学の課題の検討、とりわけ今日の発達教育臨床に関わる議論においては、実践を支える人間発達科学と教育思想の歴史を踏まえなくてはならない。

かかる観点から、前報（間宮、2005）では、戦前から戦後1960年頃までのわが国におけるフランス語圏心理学の導入と受容の過程を発達教育臨床研究の見地から、「フランス語圏心理学の導入と受容は、単にひとつの学派の選択というにとどまらず、精神障害をもつ人々や子どもの生存・成長を保障しようとする幅広いScience de homme（人間の科学）、あるいは

* 北海道大学大学院教育学研究院人間発達科学分野・准教授

はScience de éducation（教育の科学）の方向性を示唆するものである」と述べた。

しかしながら、フランス語圏心理学は、わが国に正確に導入されたとは言いがたく、とりわけ、基底を成すフランス文化・思想の深層部分が容易には理解されず、それは、未だ本当には受容されていない。そして、そのことが、わが国の子ども・若者の人格発達の危機とそれへの対応を論じる際に少なからず「損失」になっているのではないか、との見解を示した。

20世紀前半までのフランス語圏心理学は、ヨーロッパ哲学・思想と臨床精神医学の研究から成り立つ病理的心理学(psychologie pathologique)及び発生的・発達の心理学(psychogénèse)を第1の特徴としている。それゆえに、それぞれの時代背景に照らしてこれを顧みるならば、実践を支える人間発達の科学や教育思想の歴史を踏まえるという観点に立つ議論を行なう場合に、今なお寄与するところが大きいのである。

本論では、主として、1960年代以後に形を成してきた発達教育臨床に関わる児童精神医学及び障害児教育の研究領域を中心にフランス語圏心理学の影響を整理し、検討を加える。

I. 戦前から戦後期に至る研究

前稿においては、戦前における心理学者の野上俊夫、城戸幡太郎、そしてフランスから帰国後に医学を修めた宮城音弥、精神医学者の今村新吉と村上仁、さらに、戦後の教育学者の勝田守一、といった先人の業績と研究の特徴に触れた。これらの研究者は、わが国におけるフランス語圏心理学導入の先駆者であるが、そこにいたるまでに、大方、英独仏3カ国語の履修や東洋思想を含む青年期の幅広い教養修得の課程が影響を及ぼしていることがうかがわれた。すなわち、彼らは、政治学・日本政治思想史の丸山（1961）がいうところの「ササラ型」の人々で、細分され、専門化した形態を当然のこととして受けとろうとしていた時期に、ヨーロッパの個別科学の根が共通であることを理解しようとしていた。ギリシャ・中世・ルネッサンスと長い共通の文化的伝統が根にあって、そのうえで末端がたくさんに分化していることに気づいていたのである。したがって、必ずしも唯に「フランス学派」ではないという共通の特徴がある。

わが国においてフランス語圏心理学の導入を図る場合、語学上の制限のみならず、第1の特徴である病理的心理学の習得に实际的な制限があったということを見捨てることはできない。したがって、臨床医学を担った神経学・精神病学を専門としていた医師のほうがより近いところにいたと見做すことが可能である。これに関わって、早くも、1869（明治2）年頃には、明治政府はドイツ医学を取り入れることを国策としており、指導者としてドイツ人医学者を招聘し始めたこと、独仏戦争（1870～1871年）においてドイツが戦勝したこと、その後、西洋医学の中でのドイツ医学の隆盛という事態が続いたことも決して等閑視できないことである。

さらに、留意すべきは、当時のフランス語圏心理学の濃厚な哲学的思想的傾向は、実証の科学として独立しようとした世界の心理学の歴史的な流れ、あるいはevidence based medicine重視の医学研究の流れなかでしだいに敬遠されるに至ったと見られることである¹。

前述の研究者らが留学中にふれた研究動向は、当然ながら帰国後の研究内容にある程度影響を及ぼしており、これは他の分野の先人の例と同様であるが、研究・教育の継承・発展という見地から重要であるのは、帰国後に、大学等の研究機関において系統的な教育の機会を

設定しえたか否かということである。一定の継承がなされた場合とそうでない場合がある。

そのような現実の諸制限のなかでは、結果的に、一定の大学において研究・教育が継承されたに過ぎなかった。発達教育臨床研究に連なる数少ない拠点とは、京都大学医学部、東京大学教育学部などである。前者は、1903年創設の精神病学教室そして後の精神医学講座であり、後者は、1949年創設の教育哲学・教育史研究室および教育心理学研究室である（加藤・間宮、2006；間宮・加藤、2007）。周知のように、波多野完治は、戦前から個人でフランス語圏心理学の研究を行っていた先達とすることができる。

もとより、ここで「フランス語圏心理学の導入と受容とその影響」というテーマを設定しているのは、「輸入」の経過を辿ることにあるのではなく、今日のわが国の発達教育臨床の研究課題に迫るために、独自の子ども・若者研究の見解と蓄積をもつフランス語圏心理学にふれ、その成果に照らし合わせてわが国の実践と研究の過程を検討することにねらいがある。しかし、これを振り返ると、1960年代までにフランス語圏心理学がわが国の実践と研究に一定の影響を及ぼした反面、ほどよく定着し影響を与え続けてきたとはいいがたいことが理解されてくる。

大泉（2003）は、『心理学者事典』の「はしがき」において、「欧米心理学の『受容』問題に関心が向けられている場合が多いようだが、時期区分の観点からすれば、戦前と戦後の断絶ないし転換と連続性という二面性をどう理解するかが重要な課題になると思う」と指摘している。われわれは、実践的な課題意識にあわせて、いかなる歴史的な視点をもつかも問われていた。フランス語圏心理学の導入と受容の研究も例外ではない。

Ⅱ. 発達教育臨床研究とフランス語圏心理学

今日の子ども・若者の成長・発達の困難と支援の実際の方向を展望するにあたって、フランス語圏心理学は貢献するところがあるのか。本研究の第一の目的はその問いに答えることにある。

この議論を少しでも容易にするために、本論では、前報でのわが国における戦前からの研究に関する検討を受けて、戦後の発達教育臨床研究の担い手のうち、主に児童青年精神医学と障害児教育という二つの領域とあわせて発達心理学の研究動向をとりあげようと思う。

世界で最も古い歴史を有するフランスの児童青年精神医学（psychiatrie française de l'enfant et de l'adolescent）は、長い前史を持ち、独自の子どもと成人の病理的心理学を有していた。また、教育との結びつきが強く、子どもの権利に関する議論を長くあわせ持つことに特長がある（Duché, Didier-Jacques, 1990）。すなわち、フランスでは、子どもの成長・発達を考える限り、少なくともピネル（Pinel, Philippe. 1745–1826）以来の堅実な精神医学の理論と臨床の双方の影響をみると同時に、イタール（Itard, J.M.G. 1774–1838）、セガン（Séguin, É. 1812–1880）に代表される教育・治療教育の伝統をもあわせてみる必要がある。これは、今日まで引き継がれているかの国の基本的な姿勢で、発生的・発達論的な病理的心理学と再教育（rééducation）とが早くから連結していたことによる。今日でも、代表的な教科書は必ずこの歴史を紐解くことから始まり、しかも記述は厚い（Levovici, S., Diatkine, R., Soulé, M. 1985/2004）。研究史もユニークである（Duché, Didier-Jacques, 1990；Soulé, M., 2006）。

今では、世界中で、児童青年精神科医療はリハビリテーション及び教育と連結することが当然のことと考えられているが、ここでいう再教育とは、非行少年の補導、作業指導などの広い範囲を意味している。フランスでは、この、子どもの権利を重視する精神医療が形を変えて継続されている。人口 6,050 万人の国にもかかわらず、児童青年精神医学講座のある大学は 33 大学、かつ、児童青年精神科医師数は、ヨーロッパでは群を抜いて 2,000 人に達している（山崎、2002）。この驚くべき事実は意外に知られていない。

このように、フランス語圏心理学がその成り立ちの時点から発展させてきた臨床に根付いた子ども研究には際立った特徴がある。

その一端は、以前、サルペトリエール病院とビセートル病院の精神科医師であり、後に、コレージュ・ド・フランスの教授であったワロン（Wallon, H. 1879–1962）が、1948 年に創刊した雑誌 *ENFANCE* にうかがうことができる。創刊時に掲げた心理学・教育学・神経精神医学・社会学を繋いで総体から子どもを見ようとする理念は今も継承されており、子どもの研究にかかわる医学、心理学、社会学、障害児教育、心理教育、その他の専門家など、投稿者は実に多岐にわたっている。当初、この雑誌には、パリ心理学研究所・国立職業指導研究所の中の「児童精神生物学実験室」（Wallon, 1953）にかかわった研究者らが研究成果を発表していた。それには、若者の労働研究、職業指導研究のような基礎研究も含まれており、今日のわが国における若者自立支援の課題研究の観点からも再評価に値するものである。

戦後にフランス留学（1970～1971 年）を果たした数少ない精神医学者のひとりである村田（1972）は、パリ大学部医学部医学心理学講座での研修を終えて、「児童精神医学的な研究は古くから教育学や治療教育学の中にその根をおろしていた」と述べて、Itard, J.M.G., Séguin, É.ら先駆者の努力と、その後の教育と医学の連携について強調している²。

同様に、最近のフランス精神医学の動向にふれてきた将田・大島（2004）の紹介においても、「ここで注目すべき点は、小児・思春期の治療において教育という次元が重視されていることである。この背景には、18 世紀後半のルソー-Rousseau, J.-J. の教育論に見られるような子どもに対する関心、社会が子どもをどう扱うかというフランス独自の視点、19 世紀初頭に精神遅滞や聴覚障害をもつ子どもにとって医学的観点から教育の重要性を指摘したイタル Itard, J.M.G. など、さまざまな人道主義的かつ革新的な流れがある。また現在の子どもの精神医療に影響を与えた思春期を対象とした歴史的な中間施設が数多くみられ、小児・思春期精神科医療の基盤になっている」と簡潔に記されている。

長いあいだの伝統と蓄積を有するフランスの研究・実践は、書物やパリの活動概況だけを見ていてはわからないことがたくさんある。また、理論だけではなくて、実践を支える人間発達の科学や教育の科学の本質的な全体の特徴をつかむ必要がある。

そのように考えると、思いのほか大事なことがわが国に正確に伝えられて来たとは言いがたいように思われる。

ここでいう発達教育臨床を、簡潔に、子ども・若者の成長・発達の困難に取り組む実践的研究領域と定義した場合、発達障害、不登校・ひきこもり及び非行の問題を呈する子ども・若者の教育を検討することを省くことはできない。

そこで、本論では、これらの問題に関わる研究においては、フランス語圏の児童青年精神医学と障害児教育および発達心理学研究がどのようにわが国に影響を与えてきたのかを検討する。

Ⅲ. 児童青年精神医学の研究

(1) 医師ジルベール・ロバンと吉倉範光

戦後、1960年に、わが国では小児科医を中心とする日本小児精神神経研究会が創立され、また、同じ年に、精神科医を中心に日本児童精神医学会が創立された。後者は、非医師の近接領域会員を多数擁する学会（1982年に「日本児童青年精神医学会」と改称）であり、発達教育臨床研究と深いかかわりをもっている。この学会を代表する研究課題は、しばらくのあいだ、自閉症研究と不登校研究であった。むろん、実際の課題がこれに尽くされているのではないが、発達教育臨床研究とのかかわり而言えば、今に至ってなおも代表的な研究課題であり続けていることに相違はない。これらの問題に、フランス児童青年精神医学はどのように貢献するところがあったのだろうか。

精神医学者・今村新吉が渡仏したのは明治期、心理学者・野上俊夫は大正期のことである。しかし、戦後、わが国にフランス語圏心理学を導入することに貢献した滝沢武久によれば、わが国でフランス語圏心理学が最初にブームになりはじめたのは、デュマ（Dumas, G. 1866-1946）が来日した1927（昭和2）年、そして、波多野完治によるビネ（Binet, A.）の『新しい児童観』が出版された1928（昭和3）年頃、すなわち昭和初期であるという（加藤・間宮、2006）。その前年の1925年には、山田吉彦（きだみのる）訳でリボ（Ribot, T.）の三部作（「記憶の疾患」1881年、「意志の疾患」1883年、「人格の疾患」1885年）が『リボ変態心理学』として出版されている。しかし、このブームのはじまりがアカデミックな流れに与していたとはいいがたく、一部の医師や教育関係者以外にこれを受け入れる状況にはなかったと察せられる。

1937（昭和12）年に、パリで第1回国際児童精神医学会が開催されている。直後の1938年に、精神科医村上仁（京都帝国大学医学部）がパリに渡ったが、戦雲急のヨーロッパ事情のなかでじゅうぶんな研鑽ができなかったと言われる（関根・松本、1997）。

蓋し、1937年は、Wallonがコレージュ・ド・フランスの教授に就任した年であった。翌1938年は、そのWallonがフランス最高の知性を結集して*Encyclopédie Française, t. VIII, La Vie Mentale*.（『フランス百科事典』第8巻、「精神生活」）を編纂した年である。Wallonには、それまでに、*L'enfant Turbulent*.（『落ち着きのない騒がしい子ども』 Wallon, 1925）をはじめとする子ども研究の出版物がある。すなわち、フランスでは、すでに子どもを発生的・発達的に捉える精神医学、心理学がかなりの水準に達していたわけである。

このような状況にあったフランスの児童青年精神医学の実態を、わが国の一般読者に伝える貴重な翻訳・紹介がある。パリ市内のアンリ・ルセル病院で実際に診療を行っていた医師ジルベール・ロバン（Robin, G., 1935）の*Les Troubles Nerveux et Psychiques de l'Enfant*.（『子どもの神経と精神の障害』）が、吉倉範光の訳で『異常児—その鑑別と保導』（全438頁）と題して1940（昭和15）年に白水社から出版されているのである³。吉倉は、1905年生まれ、1933年慈恵医科大学卒業の医師である。

訳本の目次内容を以下に紹介する。いわゆる通俗書・啓蒙書であるが、1930年代にパリ市内の病院で子どもの診療を行っていた精神科医師たちの、診療の背景にある子どもの症候論、さらには子ども理解の様子が推察されよう。

異常児 —その鑑別と保導—

ジルベール・ロバン

まえがき

子供の精神の発達とその障害の発生（フロイトの説とアドラーの説）

第1章 病的な類型

感じ易い子供
 落ち着きのない子供
 気分の交代する子供
 けだるそうな子供—子供の精神衰弱
 一生赤ん坊—感情発達不全—感情幼年症
 子供の作話症
 空想を描く子供
 衝動的な子供
 偏執的な子供
 不良児

第2章 教育に起因する精神障害と感情に起因する精神障害

第3章 気質と性格の障害

子供の癇癪
 子供の虚言
 子供の家出
 子供の盗み
 告口をする子供
 子供の強情と拗ねること
 からかふ 残虐 罵る
 子供の病的な笑ひと薄笑ひ
 子供の眼つきの精神による障害
 物言はぬ子供（緘黙と啞）
 子供の摂食の精神神経的障害
 咬爪症（爪をかむ子供）
 悪癖（オナニズム）

結 び

本書では、はじめにFreudとアドラー(Adler,G.)の学説を紹介している。それらを「再論などしてはいない。子供の類型を語ろうと思っているのである」というのである。ここに精神分析に対する態度と当時のフランスの児童精神医学のひとつの立場が見てとれる。たとえば、

現在のDSM-IVの広汎性発達障害をこのどこに探すかは容易ではない。「落ち着きのない子供」, 「一生赤ん坊」などの項に含まれる場合もあろうか。訳にあたっては「宮城音弥氏の有益な助言」を参考にしたとある。訳語の捻出には相当の苦労が伴ったことがうかがわれる。ちなみに、現代児童精神医学の原典とされるKannerの*Child Psychiatry*を黒丸正四郎・牧田清志が共訳・刊行したのはずっと後の1964年のことである。なお、KannerはRobinの研究に再三ふれている。

吉倉は、この後、昭和19年に『精神医学の黎明—中世紀魔術思想の克服—』（全345頁）を著しており（吉倉、1944）、フランス語によるヨーロッパ精神医学史と宗教史にまたがる文献の渉猟ぶりは並大抵ではない。

しかし、何より、昭和15年という出版年であるにもかかわらず、「わが国でも『異常児』は異常な反響をよんだ」（『異常児の教育』「訳者まえがき」、1970年）というのであるから、これは驚くに値しよう。

間宮（1998）は、戦前の医学者らによる教育病理学・治療教育学の研究について検討している。そこでレビューされたのは、ビネの知能検査に関するもの以外、大半はドイツの研究を取り入れたものであった。しかし、吉倉のこの訳書を見ると、昭和15年という時点でフランスの児童精神医学の啓蒙書が一定の読者を確保したことがうかがえる。これについては、黒丸・島田（1980）など多くの歴史総括ではふれられていないけれども、それなりの意義であろう。すなわち、わが国の「臨床心理学の起点」を考える場合、子どもの発達教育臨床研究においても、「アメリカだけではなくヨーロッパの心理学をうけとめる流れがあったこと、そして新しい日本と日本人のあり方を主体的に模索しようとした臨床心理学的研究があった」（間宮、2001）ということのひとつの例である。第2次世界大戦中の目立たぬ動きであったにせよ、子どもの研究において、同盟国ドイツ・イタリアはなくフランスの児童精神医学の啓蒙書が翻訳紹介され、一定の読者を獲得していたのである。

Robinは、訳者の吉倉によれば、パリ大学精神病学教授アンリ・クロード（Claude, H.）の門に学んだ医師で、1942年にはRobin（1942／1951）*L'éducation des Enfants Difficiles*. を出版している。これは、吉倉によって文庫クセジュ『むつかしい子の教育』と題して戦後の1951年に訳出されている。吉倉は、ロバンを「実際の方面ではおそらくフランスで唯一の人ではなかろうか」（『むつかしい子の教育』「訳者まえがき」）と高く評価して紹介し、続けて「昨年（筆者注：1948年）、パリ大学に世界最初の小児精神神経病学の講座が開かれ、ユイエが初代の教授に任命された⁴。小児の精神分析の方面ではピションが活躍している。小児の精神病学ではワロンという当代随一の理論家がいる。これらのすぐれた頭脳からつぎつぎに生み出される輝かしい業績は、必ずや世界の学会と人類のために偉大な貢献をするであろう」と記している。

そして、『むつかしい子の教育』を翻訳し終えて、吉倉は1954年までパリ大学医学部に留学する。パリ市内で臨床に従事するRobinに会い、小児神経学のアンドレ・トマ（André-Thomas）の影響を受けて帰国。主に子どもと成人の神経病理学（neuropathologie）、神経学（Neurologie）を修めた。後に日本大学医学部教授となる。小児神経学の名著『小児臨床神経学入門』（南山堂、1966年）を出版、さらに『図説 小児神経病』（金原出版、1973年）を出している。これらを熟読し、その診察の方法に学んだ小児神経科医師も少なからず存在し、わが国の障害児医療に貢献した。

1970年には『むつかしい子の教育』は、改訂されて『異常児の教育』として出版されている。そこでは「ロバン以外のは、アメリカのカナン（Canan）の大冊の亜流にさえ見えるほど、独創性がない。ロバンの記述は、フランス一流のモラリストの筆触をもち、描写は生きている。大人もそうであるが、子どもの人格、性格、気質は、フランスに行けば、かくも風変わりな型があるかと驚くほど『多様』である。できあがりの学術語で類別してしまうのは、まだ早い」と書き加えている（文庫クセジュ・改訂新版『異常児の教育』「訳者まえがき」）。この文庫クセジュ本は、1975年の段階で4刷を数えた。

この訳書の初版から改訂に至る期間は、わが国において登校拒否の問題が国民的な関心を呼ぶようになっており、また、自閉症児、重症心身障害児の医療・療育など障害児医療、障害児教育の関心が急速に高まっていた時期にあたる。児童精神医学のみならず、広く発達教育臨床の諸領域において実質的で批判的な展開期であった。それはまた、戦後高度経済成長に伴う社会問題が顕在化した時期であり、国民の人権意識や医療・教育の要求の高まりが背景にある。さらには、大学紛争の火蓋が切られ、日本精神神経医学会の「紛糾」は、子どもの精神医療や障害児教育の分野にも大きく波及した。従来の学問研究は根本から問い直されたのである。

その時期に、Robinの啓蒙書もわが国でそれ相当の読者を得たことになる。

Kannerの児童精神医学の本が専門家のための参考書・指導書であるのに比べて、Robinのこの著作は、親や教師に呼びかけるような調子がある。たとえば、結語の部分でこう書き記すのである。

Eduquer! Rééduquer, car il nous faut construire, il nous faut diriger. Des petits êtres humains se forment et se développent, des adolescents attendant nos directives.

訳者の思いが込められた調子をここではそのまま参照しよう。

「教育せよ。再教育せよ。建て直さなければならない、導かねばならないからだ。子どもは生まれ、発育し、青年は大人の指導を待っている」。

Robinのいう *enfants difficiles* という概念は、発展したかのように見える発達教育臨床研究のなかで、子どもをつかむうえで今なお精彩を失っていない。

1951年版の原著と訳書の目次を紹介しつつその所以を検討しよう。

むつかしい子の教育 (L'ÉDUCATION DES ENFANTS DIFFICILES)

ジルベール・ロバン (Robin, Gilbert)

訳者まえがき

第1章 むつかしい子とは

Qu'entend-on par enfant difficile?

第2章 むつかしい子を探して

Les déistage des enfants difficiles

児童相談

consultations psychologiques

第3章	しつけの悪い子 教育の誤り 情緒でおこる性格の障害	Les enfants mal élèves erreurs éducatives perturbations d'origine affective
第4章	悪に染まった子	Les enfants pervertis
第5章	偏執児	Les enfants paranoïaques
第6章	落ち着きのない子	Les enfants instable
第7章	不良児 非行体質 (道徳病) 衝動児 道徳的無頓着 後天的非行	Les enfants pervers a) Les pervertis instinctifs b) Les impulsifs c) Les nonchalants moraux d) Les perversions acquises
第8章	教育者の教育 教育者の資格	Éducation de l'éducateur. Les qualités de l'éducateur
第9章	教育の根本原理	Principes élémentaires d'éducation
第10章	むづかしい子に適する教育原理 Principes éducatifs adaptés aux caractères difficiles	
第11章	余暇の問題	Le problème des loisirs
第12章	むづかしい子の教育における制裁 Les sanctions dans l'éducation des enfants difficiles et pervers	
第13章	青少年の性格異常の心理学的再教育法 Les méthodes de rééducation psychologique des troubles du caractère chez l'enfant et l'adolescent	
第14章	少年法と少年審判所, むづかしい子と犯罪児を収容する施設 Législation et Tribunal pour enfants. Où placer les enfants difficiles et pervers?	
第15章	結 び	conclusions

1951年の文庫クセジュ初版の表題は『むづかしい子の教育』であったものが、1970年版においては『異常児の教育』となってしまった。それも、子どもの「発達する権利」の議論が盛んになり、「発達保障」が叫ばれていた時のことである。表題のみならず、今日のわれわれが到達点からすると、不適切な訳調の箇所もあり原典の格調を伝えきっていないのが今となっては惜しまれる。その後に議論が高まった子どもの権利の尊重と社会的リハビリテーションの重視という伝統を訳書は伝えきれていないのである。

しかし、Robinが著わした*Enfants Difficiles*の内容は、併記したフランス語を見ればあきらかなように、今日にいう「困っている子ども」ほどの意味を有するのであって、むしろ「むづかしい子ども」である。なにより、Wallon(1939)がそうであったように、フランスにおける子どもの権利の追求、すなわち、社会の現実と動向をよく見極める大人による保護 (protection)、教育 (éducation)、指導 (orientation) という観点が基本にある。difficile、すなわち、

むつかしいのであるから、神経精神医学による対応だけでなく、再教育を重視し、法的処遇、労働の保障までの全体を見通して考えようとするのである。

したがって、この小さな文庫本は、古い歴史と伝統を有するフランスの子どもの見方、教育のあり方を示す大きな書物、そして羅針盤であるということができよう。

第7章の「不良児」(Les enfants pervers)には、著者自身が言うフランス学派(école française)の特徴がよくあらわれている。pervers instinctifs(非行体質)などの概念を使って理解しようというのであるが、このenfants perversという捉え方こそ、今日の発達教育臨床における検討課題である発達障害・児童虐待・非行に関する総合的研究の先駆的な概念といえる。子どもの問題を、常に、生物学的、社会的、心理学的に見ようとして、ひとつの観点からのみ論じないのである。

また、本書の面目は、第8章以後にあると言っても過言ではなかろう。医学の限界を悟って教育に期待する態度は潔いほどであるが、これが歴史と伝統にほかならないことはすでに述べた。心理学、神経心理学、精神運動療法(psychomotrice)を重んじ、精神分析的治療をきちんと位置づけ、学校教育と進路指導・就労保障、さらには司法的処遇と歴史的中間施設が位置づけられる。実に、フランスの伝統を踏まえた総合的な子どもの発達保障の書であることがわかる。

バリュック(Baruk,H,1967)をして「ナジョットの病棟での治療を受けた騒がしい子どもについての学位論文と諸業績、高等学術研究所やコレージュ・ド・フランスでの講義によってあらゆる研究の発展を新たにもたらした」と言わしめた理論家Henri Wallonとまったく重なる時代に、パリ市内の一病院で診療を行っていた一児童精神科医の実践的な書物がわが国に伝えられたことの意味は大きかったのである。

(2) パリ大学医学部デュシェ教授の児童青年精神医学

本論では、まず、発達教育臨床研究への影響という観点からフランスの児童青年精神医学について検討している。わが国では、フランス語が堪能な医師や心理臨床家、教育研究者が少ないなかで、文庫クセジュは貴重な情報源であったろう。フランス児童青年精神医学については、先述の村田(1972)の紹介があり、村上仁監訳のモーリス・ルクラン(Maurice Reclin)編『現代応用心理学』(白水社)第7巻(1975年)、第8巻(1974年)には、いくつか児童臨床関係論文が収録されている。しかし、文庫クセジュのように手軽に入手できるものは他にない。

そのような理由から、次に、同じ吉倉範光の訳による『子どもの精神医学』(Duché,Didier-Jacques, 1974)を吟味しようと思う。ここで参照する原著は1988年版で、若干の書き換えがある。

Duchéは、パリ大学医学部児童青年精神医学講座の第3代目の児童青年精神医学専任教授である。訳者の吉倉は、ここでも、「その症候も、これまでのいかなる著者の記述にもみられない豊かさで描かれている。それはフランス人の人間学の知識の豊かさに負っている」と紹介している。

子どもの精神医学 (LA PSYCHIATRIE DE L'ENFANT)

ディディエ・デュシェ (Duché, Didier)

訳者のことば

まえがき

introduction

第1章 成長と発達

Croissance et développement

第2章 検査の技術

Technique d'examen

第3章 諸障害

Les troubles

第4章 治療

Traitements

結 び

Conclusion

文 献

Bibliographe

著者には『児童精神医学提要』(1971年)などの専門書がある。また、臨床精神医学研究を遙かに超えた子ども研究の書である*Histoire de la psychiatrie de l'enfant* (Duché, Didier-Jacques, 1990) が、2005年に、『小児精神医学の歴史：子どもとは何か』というタイトルで翻訳刊行されている。しかし、この一冊の文庫クセジュの内容をうかがうだけでも驚きを禁じえない。なにぶん、本書は、1970年～1985年までパリ大学医学部児童青年精神医学教授（サルペトリエール病院児童精神科医長）を務めた精神医学者の小教科書なのである。彼の考えは、フランス語圏の児童精神医学、障害児教育、少年司法などに実際に影響を与えずにはおこなかつたろう。

はじめの歴史記述が、Itard, J.M.G., Séguin, É. の紹介にはじまり、ピセートル病院やサルペトリエール病院などでの実績が説き起こされ、観察が大事であること、子どもの精神医療がチーム・ワーク以外には考えられないこと、再教育の独自の値打ちがあること、その他の方法が示される。発達心理は、ピアジェ (Piaget, J.), Freud, S., Wallon の3人に代表させている。伝統を持つ神経学の領域をわずかの枚数のなかにしっかりと収め、子どものヒステリーも堂々と厚みのある記述になっている。

しかも、1974年の時点でなお、アメリカのKannerやイギリスのラター (Rutter, M.) がほとんど登場していない。「子どもの精神病」(psychoses infantiles)の項でようやく「カナの自閉症」(Autisme de Kanner)が簡潔に紹介されるだけである。アスペルガー (Asperger, H.) の自閉的精神病質に関する記述はそのままでは見当たらない。そしてRobin同様に非行問題に詳しい。

英米独などの研究を参照しなくてよいというわけではないが、1960年代から、わが国では自閉的か否か、アスペルガー・タイプかカナ・タイプか、といった詮索と論争が繰り返され、治療・教育の現場では実践が必ずしも進展しなかったということをここで想起せざるをえないのである。遊戯療法がかろうじて行われ、主観的論争とも言える自閉症論議にどれほど労力を注いできたことだろうか。一方で、フランス児童青年精神医学を修得して帰国した村田豊久らが集団療法の試みを開始したことは注目に値するのではなかったか(村田, 1998)。

本書を参照すると、それらの背景が浮かびあがってくるのである。「精神運動性症候群」(syndromes psycho-moteurs : Wallon) に注目してきた歴史がある。

この独自のフランス精神医学を顧みるとき、われわれにとって、再考に値すると思われ、また、共感するのは、今日の研究課題である軽度発達障害の一群に関連する知見と治療・教育の理念の数々であろう。「アングロ・サクソンの学者は、この症候群を多動症候群とよび、脳の微小損傷によっておこっているといっている」と一瞥しつつ、1974年に至ってなおも、そして今も独自のなのである⁵。Les débiles légers (軽い知的障害)、Les débiles dysharmoniques (不調和な知的障害)、Les débiles mentale dite camouflée (カムフラージュをほどこしたような知的障害)などの概念で示される子どもたちのことである。これらは、学習障害や注意欠陥多動性障害などのことをさしている。

本書の第3章「諸障害」は、Kannerの「症候論」にあたり、原題はtroublesである。いかなるtroublesをもつていようとdysharmonique (不調和的)であろうとも成長・発達をとげつつある子どもとみようという精神がある。もちろん、神経科学の重要性は認めつつも、Robinと同様に、再教育による人格の成長・発達を基本におく。フランスでは、今なお「一つの症状を多因子的要因の関与した一種の不調和dysharmonieととらえる。子どもは変わり得るのだという考えが強く、確定診断よりは精神病か自閉症かという大枠の議論がまず行われる」(将田・島田, 2004) というような背景があることがわかる。

本書に見るように、1970年代はそれがあきらかである。むしろ、頼もしいほどの自主独立の考え方であるかに思える。

精神運動障害 (les trouble psychomoteus) という伝統の概念はDuchéのこの小教科書でも出色である。「精神運動障害、たとえば極端な多動性、運動障害 (débilité motrice)、騒々しい落ち着きのなさ、攻撃性、制止、受身であること、それらも精神運動教育の各種の方法によって改善される」(p.120) とある。

第4章「治療」traitementでは、予防、器質的なものに的をあてた治療、特殊な再教育 (rééducations spécialisés)、心理的治療、入所と入院 (les placement) が紹介されている。精神運動療法などの再教育、施設の有効な活用が特徴であるが、最近の傾向として精神分析の評価は高く、また、サイコドラマが重視されてきている。精神分析の評価とは、すなわち、エディプス葛藤を決して無視しない観点があるということになる。さりとて、フランス内外で高い独自の評価を得ているラカン (Lacan,J.) 派だけが、あるいはマノーニ (Mannoni,M.) やドルト (Dolto,F.) のように子どもの無意識や象徴体系を扱う精神分析だけがフランスの発達教育臨床研究だということではない。

まず、不調和をかかえながらも生活して行く子どもの成長・発達を促すにはどうしたらよいか、という基本的な観点がある。そうであれば、当然、さまざまな専門職種の役割があると考えられて、また、家族や関係者への支援が用意される。これは、初代教授ユイヤー (Heuyer, G. 1884 - 1977) の時代に確立された基本的な姿勢である。それぞれの国の制度の違いがあるとは言え、いち早く導入すべきはそうした支援の体制と教育内容なのではなかったか。

(3) 子どもと社会の精神医学・心理学

将田らが言うように、フランスの精神医学や精神医療については、古典的フランス精神医学特有の診断学および症候学やラカン派精神分析以外ほとんどわが国に伝えられてこなかっ

たと言って過言ではないかもしれない。しかし、実際の留学経験者は、フランス国内に存在する地域精神医療の堅実な体制——ここで、わが国のおよそ半分の人口の国に児童青年精神科医が20倍にあたる2千人いる事実を記憶に留めおくことにする——と職域の豊富なかつ個性的なスタッフ群について述べることが多い。たとえば、藤井（1994）が調査したフランスの知的障害児親の会の管理者組合が経営する生徒数116名（6～20歳）の養護学校には、「医療部」があり、そこには、内科医（非常勤）、精神分析医（非常勤）、心理運動士（2名）、言語療法士、心理学士、看護婦、ソーシャルワーカーがそれぞれ1名配置されていた。

わが国の児童青年精神医療の発展に関していえば、本論で述べているようなフランス児童青年精神医学の一連の流れは決して無視できないはずである。そして、それは次項の障害児教育や施設の治療教育にも関連する。

最近の『児童青年精神医学事典』（Honzel,D., Emmanuelli,M., Moggio,F., 2000）などを参照すると、さすがに世界の動向に目配せしており、たとえば不登校(*refus anxieux de l'école*)も2ページにわたる記載がある。発生率はフランスの学校期にある子どもの0.3～1.7%であるという。しかし、そこで目だって紹介されているのは、それを生み出す特殊な教育事情——学校の競争システムと端的に述べている——の記述にあるように、日本の現実である。編者は3人ともバリ精神分析学会員であるが、しかし、この事典もまた独自の項目配列と記述内容であることが注目される。たとえば、わが国のほとんどの心理学・精神医学関係事典では記載がないpsychomoteur（精神運動または心理運動）に関する記述は2ページ半に及んでいる。加えて、運動と精神の同一性と対立、発達における正常と異常の同一性と異質性に関する研究の蓄積が散りばめられている。

さて、最後にもう一冊、同じ時期の児童精神医学書についてふれておくことも意味のあることであろう。1959年刊 *ENFANCE* 誌が「ワロン特集」を編集した際の編集委員のひとりで、パリ病院勤務のクパーニク（Koupernik,C.）は、1974年に、グラスゴー大学のストーン（Stone,F.H.）と共に児童精神医学の教科書を刊行している（Stone,F.H., & Koupernik,C., 1974）。Stone,F.H.は、「小児医学と予防精神医学」、「コミュニティと教育」といった観点を視野にいたしたスコットランドの児童精神科医である。その医師が、Duché教授時代のパリ病院の医師と英語によるテキストを作成したわけである。この合流の意味は決して小さくなかったはずである。

1980年当時、筆者自身、所属する総合病院小児リハビリテーション科スタッフとともに、この第2版（1978年）で児童精神医学を共に学んだ。そして、引用・紹介される英米の研究の豊かさに触れ、同時にフランスの児童青年精神医学の独特の薫りを感じたものである。そのときの強い印象こそ本論で紹介している流れに与するものであったろう。この初心者向けの教科書の序文は、オランダ・ユトレヒト大学の児童精神科教授カンブ（Kamp,L.N.）によっている。彼らの国フランス、スコットランド、そしてオランダが生み出す児童精神医学がある。

以来、30年が経過している。フィンランドなど北欧を含めて、この間、ヨーロッパ発の乳幼児精神保健学、児童青年精神医学は、困難をかかえる子ども・若者の発達保障のためにたえず研鑽を積み、矛盾と闘い、教育と福祉と連帯しながら歩みを進めてきた歴史があり、各国に影響を与えてきた。

Ⅳ. 発達教育臨床研究とフランスの障害児教育

(1) 知的障害教育・福祉の源流セガンから

フランスで子どもの精神医学を学ぶものなら必ずふれるであろう Itard, J.M.G., Séguin, É らの仕事。最近のわが国では、彼らを歴史記述のなかで発見することはあっても、児童青年精神科医療はもとより、障害児者教育・福祉の専門家にさえ、身近な研究対象とすることはむしろ稀になっているのではなからうか。まして、教育心理学・臨床心理学では「生理学的教育の人セガン」というほどに受け止め、表立って検討することはほとんどなくなっているように思われる。

Séguin, É については、これまでも、薬師川虹一郎訳『障害児の治療と教育』（1973年）、中野善達訳『知的障害児の教育』（1980年）、大井清吉・松矢勝宏訳『イタール・セガン』（1983年）などが刊行され、さまざまに研究されてきた。しかし、今日まで、その学問的背景・基盤が障害児教育関係者、それも歴史研究を重視する人々以外に、あまねく知られていないというのではなかった。

Séguin, É は、1812年にブルゴーニュ地方のクラムシーに生まれ、Itard, J.M.G とエスキロール (Esquirol) の指導・助言のもとに知的な遅れのある障害児 (enfants arriérés et idiots) の教育指導研究を行った人である。1841年、フォボール・サン＝マルタン街の不治者施療院 (hospice) で、翌1842年にはビセートル施療院でイディオ教育を開始し高い評価を得た。これらの施療院が病院へと変遷し、後に、ブルヌヴィル (Bourneville, D.M. 1840-1909)、そして、Janet や Wallon らの精神医学的研究が生み出されるのである。特に、ビセートルでは「障害児教育部門」が創設される。したがって、本論では、Séguin, É は児童青年精神医学と障害児教育の接点で仕事をした最初期の「教師」として指摘しておくのがふさわしい。1850年頃にアメリカ合衆国へ移住、父親が医師ではあったとはいえ一時「医師」として開業していたといわれる (津曲、2001)。大学医学部での医師養成制度が確立する以前のこととして時代背景を押さえておく必要がある。

わが国では、先の翻訳書の他に、清水寛編『セガン研究』（第1集：1975年～第6集：1982年）が貴重な資料である。また、1976年に発足した大井清吉らフランス障害児教育研究会編『フランスの障害児教育の研究』が、第1号（1977年）から第5号（1991年）まで発行されていたのが際立つ。大井は、「私たちは、歴史的条件も社会的条件も異なるフランスとわが国を短絡的に結びつけることは大へんな間違いであって、フランスの障害児教育がどのような歴史的条件の中で誕生し、どのような社会的条件の中でどのような発展をとげてきているかを研究することこそわが国の障害児教育の進展に資することだと考えています」と創刊の辞を記している。

創刊号では、ビネ・シモンの知能検査、ルネ・ザゾ (Zazzo, R.) の「精神薄弱」や知能検査に関する論文、第3号（1978年）ではラブルジュール (Labregère, A.) の「障害者の労働への権利」（原文1976年）などが翻訳・紹介されている。第4号には Séguin, É について論じた論文の紹介がある。それは、1979年の養護学校義務制がしかれる直前のことで、会員・訳者らは、必ずしも障害児教育関係者だけではなく、東京都心身障害者福祉センターなど行政の福祉・心理職員もまじっている。

それから30年近い月日を経て、清水編著（2004）においてわが国のセガン研究の大成を

見たのである（全4巻5部構成、『セガン 知的障害教育・福祉の源流 ―研究と大学教育の実践―』）。大部の研究書で、これまでの関連資料も収められている。

この発刊は、今日の、子ども・若者の成長・発達の困難に日々直面するわれわれに大きな影響を与えずにはおかぬものがある。本論において、戦後の発達教育臨床研究におけるフランス語圏心理学の影響という研究課題を掲げる以上、本書に触れないわけにはいかない。

なぜなら、Séguin,Éの研究とは、単に、そこに「生理学的障害児教育の人」を発見するのではなく、また、心理学的研究、即、知能検査法や発達論の研究というのではなく、それは、成長・発達の困難を抱えるすべての人々の生活と教育・福祉の保障に関する文字通り総合的な研究になるからである。そもそも、かつて取り組まれなかった知的な遅れのある人々への教育的支援とは何か、Séguin,Éは、これを伝える研究書を残したのである。

（2）セガンから人間科学へ

わが国で早くからSéguin,Éの研究を行っていたひとりである障害児教育学の藤井力夫は、1985～1986年にフランス国立特殊教育研究所に留学し、実際の障害児らの教育システムと子どもたちの生活にふれている。清水寛編『セガン』第2巻に「セガンの知的障害児教育の理論と実践」を寄稿しているほか、藤井（2004）には、幾多のセガン研究、フランス障害児教育の論考が掲載され、フランス障害児教育に関する知見がぎっしりと詰められている。とりわけ1830年～1840年代フランス時代の研究が詳しい。

その藤井が、留学体験をもとに、「フランスでは、クロード・ベルナール、ブローカのレベルでセガンを位置づける。同じ流れの人だというふうに位置づける」と述べているのである⁶。これは、まことに重要な指摘である。『実験医学序説』などで一世を風靡した医学者、生理学者のクロード・ベルナール（Bernard, Claude. 1813－1878）、失語症研究で歴史にその名を残す神経学者ブローカ（Broca, Paul. 1824－1880）と障害児教育のセガンが同じ流れで位置づけられるということは、本論における検討のエッセンス部分に当たる。

障害をもつ人々の支援にあたっては、基礎医学の研究と、神経精神医学の臨床と、生活と心理を重視する教育とが、同じ流れで総合的に検討される必要があるということを示唆している。これは、先述のRobin, Duchéraの大学医学部児童青年精神医学にも伝わる一連のフランスの流れを象徴的にあらわす指摘であると言ってもよからう。精神神経医学、精神分析をふくむ臨床心理学、障害児教育などを総合した人間科学のあり方を端的にあらわした表現であって、発達教育臨床研究はそういう方向をとり戻しつつ今後を志向すべきなのだと筆者は考える。

V. フランス語圏の発達心理学

少なくとも戦後の一時期、PiagetとWallonは、わが国においても、発達心理学を代表する存在と見なされていた。少なくともピアジェ研究は、わが国の学校教育の実際にも大きな影響を及ぼし、実践と研究をリードしていた時期がある。わが国「発達保障論」の提起を行い、理論的中心にあった田中昌人とふたりの関係の場合については、間宮（2005）でふれている。

ところが、現在、心理学専攻の大学生・大学院生さえこのふたりはテキストで見かける程度であろうか。Pigetの代表的著作『知能の誕生』を読み通す場合があるとしたらむしろ稀な

ことかもしれない。本論では、発達心理学の基礎研究領域にふれるゆとりはないが、少なくとも臨床心理学研究においてそのように指摘しても間違いではない。

まだPiagetへの関心の余波が残っていた頃、アメリカのRosen（1985）が臨床研究の立場からPiagetの理論を参照している。これは、臨床研究者がPiagetを盛んに検討した際の一つの成果であり、自己中心性の概念の重要性、情動と知的発達の問題、社会的認知の発達、認知 - 発達の精神病理学、これらが統合失調症圏の問題を扱う場合などに重要だと論じている。しかし、これ以後、発達心理に関する記述以外に臨床研究においてPiagetが登場することはあまり見られなくなった。

ところで、精神科医師として障害児の診療にあたっていたWallonの発達心理学については、研究ルネッサンスとも言うべき動きが出てきている。本論もそれに影響を受けているが、このルネッサンスは、発達教育臨床研究に相当のインパクトを与えずにはおかないはずである。

なかでも、発達教育臨床研究への影響という点において、パリ大学でフランス児童青年精神医学を修めた医師・山口俊郎と発達心理学者・浜田寿美男が編集した『子どもの生活世界のはじまり』（浜田・山口、1984）は欠かすことができない重要な位置を占めていると思われる。「障害児の発達臨床」という領域が特別支援教育の展開あるいは各種の心理士資格の誕生に伴って勢いを増しているが、少なくとも本書の内容と水準を省いた学習であってはならないのである。表題にも示されるところだが、本書は、フランス語圏心理学から学びとることができる多くを吸収している書物であり、その内容は決して障害児臨床にとどまるものではない。「直接に比較したり、同一視したりしようと試みないという条件つきで、正常児は障害児（l'enfant pathologique）のなかに見いだされる」（Wallon, 1925）のであって、本書から、発達教育臨床研究は多くを学ぶことになるはずである。この場合、発達心理学と臨床心理学が別々のところで成り立っているわけではない。

そのことに気づかぬままに20年の歳月が経過したように筆者には思われてならない。

これまで何度となくWallonの心理学はむずかしい言われてきた。しかし、Wallonがむずかしいのではなく、むずかしい子どもたちがいたのであり、今もいるのである。Wallonの時代に、なぜ彼らと接した精神医学者が、*enfants difficiles*, *enfant turbulent*, *enfants instable*, *enfants pervers*, などという通俗概念を使用して、その子どもたちのむずかしさを解き明かそうとしたかが、今、問題とされるべきなのであろう。

教育学の坂元忠芳が、*L'enfant Turbulent*. (Wallon, 1925) を紐解きながら、ワロン心理学のオリジナリティの起源に触れていることが重要である。

「Wallonは、非常に騒がしい子どもたち（l'enfant turbulent）を、実際に診療しながら、その症候群というものを観察し、分析する。そのなかから重要なカテゴリーを選び出して整理し、そして、その症候群を連関構造において捉えようとします。しかも、それを当時の大脳生理学、神経科学から整理し、裏付けて、その作業を発達論の心理学へと展開させています。つまり、病理的心理学・精神病理学から発達論の心理学へと展開させるという構造が、*L'enfant Turbulent* のなかにある、と仮説的に考えてみてきたわけです。Wallonには、研究対象以前の対象として、あの子どもたちの存在があった。それとのかかわりがあった。ですから、観察記録による事実があったのですが、そこから独自の発達段階論に至ったと見ることができるということです」と報告している。そして、「正常と異常は異質性と同一性をもつという思想がなければ、精神病理的な状態から発達の法則を導きだすことはできない」として、

déséquilibres (平衡失調), incertitude (不確実さ) にまず言及するのである。さらに、それを推進したヨーロッパの哲学・思想の根源を辿り、Pinelから現代にいたるまでの精神医学・神経医学・精神病理学・精神分析の系譜を辿り、Wallonの時代までの児童心理学を辿っている⁷。

わが国の子ども・若者の発達教育臨床の問題、換言すれば、不安定、不確実、平衡を逸した状態もまた、そのようなスケールで捉えるのでなければならない。

VI. フランス語圏心理学と発達教育臨床研究の方向

これまで、わが国にフランス語圏心理学が十分なかたちで根付くことができなかったこと、さらに厳しく言えば、臨床研究に伝統と蓄積を持つフランス語圏心理学が導入されてはきたが、しっかりと受容されたとは言いがたいことにふれてきた。この姿は、喩えれば、フランス語圏心理学の源流から脈々と流れている「本流」にふれることなく、とにかく翻訳をしてそのうわべの水を汲もうとしたかのように思える。一部の研究を除けば、大勢はそうのように経過してきたと見てよいのではなかろうか。

そして、それは必ずしもフランス語圏心理学の問題だけではないことに気づくはずである。わが国には、日本文化があり、ある面で誇るべき科学技術の発展の展開過程がある。そう言う場合に、わが国の文化の素地というものを自覚する必要があるということである。

たとえば、長い間続いてきた日本文化の中に子どもの権利や生活と教育を社会が保障しようという教育思想をそのまま見出すことはむずかしい。フランスで営々と蓄積されてきたごときの子どもの権利に関する議論や「病理的であること」や「異常」であることに着目して、そこから発達と生活を保障しようとする思想はそのままでは導かれない。それは、山住・中江(1976)の『子育ての書』(全3巻)に収められた江戸期までの子育ての風習や教訓でもうかがえることである。

成長・発達に困難をかかえる子どもの権利に関するこれらの議論とそれを保障する実践の源流を辿り、それを受け継いできたフランス児童青年精神医学や障害児教育の本当の発展の長きにわたる変化の姿をこそ導入し受容する作業が求められるのであろう。

また、個人の内面を支える心理療法に至っては、さらに文化の差異の問題が大きく立ち上がる。わかれわかれが日常借用しているのは技法であって、そうではないところの社会・文化の深い次元で導入し受容するのでなければ、歴史は繰り返されるばかりであろうと思う。

加藤周一(1980; 2005)は、学術・文化・芸術の輸入の問題に鋭い指摘を行ってきた人であるが、『日本その心とかたち』において、外来文化の第5番目の波が押し寄せた明治以後のわが国について次のように述べている。これは絵画の場合である。

「結論から言えば、彼らは絵画を技術と見なすことでその問題に対処した。絵画というものを生活から切り離し、自己の胸の一番深いところにある『何を描くか』ということを保留して、『どう描くか』ということに関心と注意を集中したのである。『何を描くか』は、『パリではいま何が流行しているか』ということに置き換えられて終わるだろう。かくして、新しい技術と様式を採り入れるとする、一般的で圧倒的な傾向が生じた」。そして、「20世紀の芸術家、とくに建築家、作曲家、デザイナー、舞踏家たちは、その手法や活動の場を世界

に求めてきわめて独創的な仕事をしてきた。次には、未来の芸術に向けて、自らの国の『民衆文化』のために、彼らもその出発点に戻ることだろう」と述べて締めくくっている。

児童青年精神医学、障害児教育、心理療法なども、同じように技法としてかたちを採り入れるというだけならば、実は、新しいことは何も得られない。パリを模倣するのであれば、実践の自己表現力は弱まるだけである。

このように見てくると、かつて欧米の影響を受けた明治期・大正期・昭和初期のわが国児童福祉・教育実践家の先達たち、川田貞治郎、石井亮一、留岡幸助・清男らの研究・実践が——批判的な精神を持って顧みるということを前提とするのではあるが——わが国の独自の、あるいは「土着の心理学」（大泉，1998）を構築する場合に、再びわれわれの前に登場することになるように思われるのである。

本研究は、科学研究補助金基盤研究（B）（1）助成研究（研究代表者 足立自朗 課題番号 13410032 研究課題名「第二次世界大戦前後における教育・社会系心理学の展開とその功罪」、および、課題番号 15330138（研究代表者 高砂美樹） 研究課題名「日本における教育心理学の成立と展開を巡る歴史的研究」の分担研究の一部です。

滝沢武久・電気通信大学名誉教授、坂元忠芳・東京都立大学名誉教授、堀尾輝久・東京大学名誉教授、塚野州一・前富山大学教授、藤井力夫元北海道教育大学教授、村田豊久元九州大学教授に多くのご教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。

なお、2007年度からの筆者の所属講座の名称変更に伴い、前報で「教育臨床」とした箇所を「発達教育臨床」としています。

注

- 1 フランスでは、今日でも、大学入学資格試験（バカロレア baccalauréat）には第一に哲学が課される。
- 2 2006年3月7日、筆者は村田豊久元九州大学教授へのインタビューを行い、多々ご教示いただいたうえに貴重な書物を賜った。記して感謝したい。
- 3 吉倉は、『異常児の教育』（1970年）「まえがき」で、昭和10年初版と記しているが、訳書は1940（昭和15）年発行で、原書は1935年発行。未見であるが広島大学中央図書館に原書がある。
- 4 初代ユイヤー（Heuyew,G.）教授と第2代ミショー（Michaux,L.）教授は、児童と成人の精神医学を兼任していた。1970年、第3代ディシェ（Duché,D）教授がはじめて児童青年精神医学の専任教授になった。
- 5 パリ大学児童青年精神医学教授Ferrari（1999）の子どもの自閉症論は、今なお「アメリカの分類」DSMからはじまるのではなく、フランスではどう捉えてきたかの歴史的検討からはじまる。
- 6 藤井力夫氏は元北海道教育大学教授。2006年2月23日に札幌市内三和荘にてインタビューに応じていただき、多々ご教示いただいた。この指摘に関する「研究雑話（11）体温計の開発と障害児教育：セガン、ブルネヴィル、ベルナル、三人を結ぶもの」『さんわ』第73号、1993年（『障害児教育原論考』所収）がある。神経学者ブローカについては、萬年甫訳「ブローカ：失語症の一例にもとづく構音言語機能の座に関する考察」、同訳「ブローカ：第三回前回の病変によっておこった失語症（aphémie）の新しい症例」のほか、萬年甫の解説（秋元波留夫ほか編『神経学の源流 失語症—上—』1982、創造出版、所収）がある。
- 7 坂元忠芳「ワロン心理学のオリジナリティの起源について」。これは、2005年8月22～23日、札幌市で行われたワロン研究会で報告された。

引用文献

- Baruk, H. 1968 *La psychiatrie française*. P.U.F. (中田修監修 影山任佐訳 1982 フランス精神医学の流れ 東京大学出版会)
- Duché, Didier-Jacques. 1974/1988 *La psychiatrie de l'enfant*. Collection QUE SAIS-JE? P.U.F. (吉倉範光訳 1975 子どもの精神医学 白水社)
- Duché, Didier-Jacques. 1990 *Histoire de la psychiatrie de l'enfant*. P.U.F. (藤元登四郎訳 2005 小児精神医学の歴史:子どもとは何か そうろん社)
- Ferrari, P. 1999 *L'autisme infantile*. Que sais-je? P.U.F.
- 浜田寿美男・山口俊郎 1984 子どもの生活世界のはじまり ミネルヴァ書房
- 藤井力夫 1994 研究雑話(23) フランスの障害者教育・福祉事情(7): 親の会が経営する養護学校 さんわ第85号. (藤井力夫 2004 障害教育学原論考 私家版 全1005頁 所収)
- 藤井力夫 2004 障害教育学原論考 私家版 全1005頁
- Honzel, D., Emmanuelli, M., Moggio, F. 2000 *Dictionnaire de psychopathologie de l'enfant et de l'adolescent*. P.U.F.
- 加藤周一 1980 日本文学史序説 加藤周一著作集, 4-5. 平凡社
- 加藤周一 2005 日本その心とたち ジブリ
- 加藤義信・間宮正幸 2006 フランス心理学とともに歩んで: 滝沢武久先生に聞く 心理学史・心理学論 Vol.7/8 合併号 53-72.
- 黒丸正四郎・島田照三 1980 歴史と現況 精神医学大系17巻A 児童精神医学 I 中山書店 6-19.
- Lebovici, S., Diatkine, R., Soulé, M. 1985/2004 *Nouveau traité de psychiatrie de l'enfant et de l'adolescent*. Volume1. QUADRIGE/P.U.F.
- 間宮正幸 1998 日本の臨床心理学の発展 心理科学研究会歴史研究部会編 日本心理学史の研究 法政出版 117-138.
- 間宮正幸 2001 臨床心理学の起点 大泉溥他著 文献選集 教育と保護の心理学 昭和戦後初期 別冊解題 クレス出版 66-75.
- 間宮正幸 2005 わが国におけるフランス語圏心理学の導入とその受容について—教育臨床研究への影響とその問題点— 北海道大学院教育学研究科紀要, 第96号1-23
- 間宮正幸・加藤義信 2007 私の教育学研究とフランス語圏心理学・教育学: 堀尾輝久先生に聞く 心理学史・心理学論 Vol.9. 37-47.
- 丸山真男 1961 日本の思想 岩波書店
- 村田豊久 1972 フランスの児童精神医学 九州神経精神医学, 第18巻第2号. 128-132.
- 村田豊久 1998 自閉症児の生涯発達 九州大学教育学部紀要, 第43巻第1号・第2号合併号 11-24.
- 大泉溥 2003 日本心理学者事典 クレス出版
- 大泉溥 1998 第4巻別冊解題 文献選集 教育と保護の心理学 昭和戦前戦中期 クレス出版 54-77.
- Robin, G. 1942/1951 *L'éducation des enfants difficiles*. QUE SAIS-JE? P.U.F. (吉倉範光訳 1951 むつかしい子の教育 文庫クセジュ 白水社)
- Robin, G. 1935 *Les Troubles Nerveux et Psychiques de l'Enfant.. : Guide pratique de dépistage et d'orientation education*. Fernand Nathan. (吉倉範光訳 1940 異常児—その鑑別と指導— 白水社)
- Rosen, H. 1985 *Piagetian dimensions of clinical relevance*. Columbia University Press.
- 関根義夫・松本雅彦 1997 村上仁先生を訪ねて 臨床精神病理, 第18巻 269-291.
- 清水寛編著 2004 セガン 全4巻 日本図書センター
- Soulé, M. 2006 *Histoires de psychiatrie infantile*. Edition érès.
- Stone, F.H., Koupernik, C. 1978 *Child psychiatry for students*. Churchill Livingstone.
- 将田耕作・大島一成 2004 フランスの精神病理学 氏原寛ほか共編 心理臨床大事典(改訂版) 培風館 681-689.
- 津曲裕次 2004 アメリカ時代 清水寛編著 セガン 第1巻 31-39.
- Wallon, H. 1925 *L'enfant turbulent*. Alcan. 2^e edition 1984 Quadrige/P.U.F.
- Wallon, H. 1939 Les droits de l'Enfant. *Pour L'Ère Nouvelle*. 192-194.
- Wallon, H. 1953 Le laboratoire de psychobiologie de l'enfant. *Bulletin Institut National Orientation*

- Professionnel*, sept. 100–102 reed. In lect. H.W., 357–360. (波多野完治監訳 1983 児童精神生物学
実験室 ワロン選集 下 227–231. 大月書店)
- 山崎晃資 2002 児童青年精神医学の歴史と特徴 山崎他編著 現代児童青年精神医学 永井書店, p.7.
- 山住正己・中沢和恵編注 1976 子育ての書 全3巻 平凡社
- 吉倉範光 1944 精神医学の黎明—中世紀魔術思想の克服— 白水社